

イザヤ書 57：14～19

ルカによる福音書 14：7～14

「高ぶる者、へりくだる者」

<安息日のファリサイ派との食事の席で>

今日の所は、14章1節の「安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。」とあった、この場面の続きになります。

先週は1～6節までの御言葉を共に聞きました。そこではイエスさまが、仕事をしてはならない安息日にもかかわらず、水腫を患っている人をいやされた、ということが語られていました。その時イエスさまは、5節にあるようにこう言われました。「あなたたちの中に、自分の息子か牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」

井戸に落ちている者というのは、自分では自分を助けられない者。苦しみや、悩みや、罪に捕らわれて、自分ではそれを解決するどんな手段も持っていない者のことです。

イエスさまはそのような、苦しみや悩みの只中にある人、神さまから離れている人、滅びに向かっている人々を、今すぐに引き上げずにはおれないのだ、と言われます。一日でも、一時でも早く、一人でも多くの者が、救いに与り、罪から解放され、神さまの恵みのもとで生きる者となること。神さまを礼拝し、神さまの恵みに応えて生きる者となること。それが、父なる神さまの御心だからです。そして、神の御子であるイエスさまは、その父なる神さまの御心、神さまの救いを実現するために、遣わされた方だからです。

しかし、律法を字面通りにしか守ろうとせず、神さまの御心を知ろうとしない、律法学者やファリサイ派と呼ばれる人々は、このイエスさまが語られること、行なわれることを受け入れることが出来ません。そして、前回のところでは、ただ沈黙するしかなかった。しかしその心の内には、イエスさまに対する敵意、殺意が高まっている。そんなピリピリした場面の続きが、今回の箇所なのです。

<座るべき席>

さて、イエスさまは、このファリサイ派のある議員が用意した食事の席で、7節にあるように、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、たとえを話された、とあります。

この「招待を受けた客」とは、3節に書かれていたように、律法の専門家たちやファリサイ派の人々のこと。つまり、イエスさまが罪から人々を解放すると語られた御言葉や、父なる神さまの救いを実現する、と言っておられることを受け入れず、反発する人々です。

彼らは、神さまの律法を人々に教え、自分たちも日常の中で誰よりも忠実にその律法を守っていました。神の民であり、神の律法をしっかりと守っている自分たちこそ、人々の正しき模範であり、救いにふさわしい、と自負している人々です。そして彼らは、神の律法を教えるという立場上、人々からの尊敬を受け、重んじられる立場にありました。

そんな彼らが、自ら上席を選んでいる。それを見たイエスさまは、「婚宴に招待されたら」というたとえで、彼らに話し始められました。

イエスさまが語られたことは、もし自ら上席に着いたら、後から自分よりも身分が高い人が来た時に、席を譲らされて、恥をかいて、末席に着くことになる。だから、最初から末席に行って座りなさい。そうしたら、招いた人が来て、もっと上席へどうぞと言ってくれる。そうしたら面目を施すことになる。こんなたとえです。

さて、これを聞いて、わたしたちはどう感じるでしょうか。考えてみると、むしろ好んで末席に座る人が多いかも知れません。表立ったところに行きたくない。目立ちたくない。遠慮して、末席に行く。あるいは、上席に案内される立場だけれども、謙遜して、控えめに振る舞って、末席に行く。最初から自分で上席に行くなんて凶々しいと思われる。だから、イエスさまの教えはもっともなことだ。そう感じるかも知れません。

でもイエスさまは、ここでそんな、社会で恥をかかないためのマナーを教えておられるのでしょうか。恥をかかないためにどうするか。面目を保つためにどうするか。そういうことを仰りたいのでしょうか。そうではありません。

今回の7～14節の中で、最も大切なポイントは、11節の御言葉です。

「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

この高ぶる者、へりくだる者、というのが、どのような者であるか。それを知ることが大切なのです。

イエスさまは、わたしたちが自分でどのような席を選べば良いか、ということを教えておられるわけではありません。最終的に、招かれた客を上席に案内するか、末席に案内するか、その場所を決める権利は、招いた人にあるからです。

ですから、イエスさまは、招かれた時に、あなたたちは、そこで自分がどういう者であるかを自覚しなさい。つまりは、神さまの御前で、あなたは自分がどういう者であるかを知りなさい、ということを教えておられるのです。

<高ぶる者、へりくだる者>

この、「高ぶる者、へりくだる者」がどういう者かは、その続きの12節以下を読むと分かって来ます。12節以下は、イエスさまがこの食事に招いてくれた人に言われた御言葉です。つまり、招待する側の人に、こうしなさい、と教えられたことです。

それは、こんな内容です。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、

近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」

ここに出て来るのは、招かれた後に、お返しをするかもしれない人と、お返しができない人です。友人、兄弟、親類、近所の金持ちは、招いてくれてありがとう、と言って、後日お返しをする力がある人、として語られています。これらの人を「呼んではならない」とありますが、これは絶対的な禁止というよりは、これらの人呼ぶよりも、むしろ、こちらの人を呼びなさい、というようなニュアンスです。

イエスさまは、お返しするかもしれない人、お返しができる人よりも、「むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」お返しできない人を、招きなさい。「そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。」と言われたのです。

[へりくだる者]

お返しができない人をこそ、選んで、招いて、もてなして、与えなさい。そうしたら、あなたは幸いだ、というのです。なぜなら、「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」からです。これは、世の終末の、神さまの審きの日のことを指しています。この日に、あなたは報われる。つまり、お返しができない人を招いたことを、神さまが喜ばれ、神さまがそのことに報いて下さる、というのです。

どうして、お返しができない人を招くことが、神さまに喜ばれることになるのでしょうか。それは、神さまご自身が、そのようなお方だからです。

お返しができない人とは、返せるものを、何も持っていない人のことです。招かれたら、ただ与えられたものを受け取るだけ。お返しもない。手土産もない。ただ、受けるだけの人のことです。何もすることができない、無力な人のことです。高ぶりようがない。このような人が、まさに「へりくだる者」のことなのです。

ですから、この「へりくだる者」は、自分で謙遜する、というよりも、低くされている者、弱くされている者、という意味合いです。

それは、前回の聖書箇所で言えば、「井戸に落ちた」人のことです。誰かが引き上げてくれるのを待つしかない。助けが与えられるのを待つしかない。救いを求めることしか出来ない。そのような人のことです。

わたしたちは、神さまの御前で、本当はすべての者が、このように井戸に落ちた者であり、お返しができない者あり、低い者、弱い者なのです。

罪に捕らわれ、神さまから離れ、御心に背き、滅びに向かい、苦しみ、悩み、倒れている。

わたしたちは、自分で自分を罪から救うことは出来ません。自分で罪から抜け出すことは出来ません。自分の手に持っているものは、何の役にも立ちません。ただ、上から引き上げてもらうしかない。自分が、そのような罪人であり、惨めさの中にいる者であると知り、打ち砕かれ、ただ神さまに救いを求めている者。それが、「へりくだる者」なのです。

しかし神さまは、そのような者をこそ、憐れんで下さいます。目を留めて下さいます。そして、そのような者をこそ、ご自分の救いの恵みへと招いて下さるのです。

神さまは、罪に捕らわれた者が、まったく無力であることをご存知です。また、神さまに差し出せるものも何もないことをご存知です。

それなのに、むしろ神さまの方から一方的に、最も愛する御子の命を、その罪人のために与えて下さる。そこまでしても、一人の罪人が、救いの招きに応えて、神さまの食卓について、喜び、感謝し、満たされること。神さまと親しく交わる者となることを、望んで下さっているのです。それが、神さまの御心です。

この、神さまの御心を知る者は報われる。この、神さまの御心を行なう者は報われる。イエスさまは、そう教えておられます。

[高ぶる者]

一方で、お返しをするかもしれない人たち。それは、自分にお返しをする力があると思っている人たちです。招待してくれた人に、後日お返しをすることが出来る。招待してくれた人と、ギブ&テイクの、対等の関係を築くことが出来る。借りを作らず、ちゃんと返すことが出来る。そう思っている人が「高ぶる者」です。

そして、ここでは特に、神さまの御前で、そのような態度でいる人のことです。

神さまが救いへと招いて下さっている。救い主として、御子イエスさまを遣わし、罪の赦しと、永遠の命を与えようと、招いて下さっている。

これ対して、本当はすべての者が、受け取ること、招きに応えることしか出来ないのに、自分に何らかの力や、能力や、救いの足しになる何かがあると思っていること。罪を赦していただくのに、神さまに差し出す何かがあると思っていること。それが、高ぶる者です。救いに対して自分の努力や熱心さが足りない、と思っているのも同じことです。それは裏返せば、自分の努力や熱心さによって、救いの何かを手に入れられると思っているのです。

しかし、神さまの御前で、本当は、誰も何も持っていないのです。資格も、特権も、ふさわしさも、力も、誰にも、何もないのです。誰一人、罪を償うことが出来る、自分の何かなど、何も持っていないのです。

だから、神の御子イエスさまが、その罪を償うために、ご自分の命を差し出して下さらなければならなかった。十字架で血を流し、肉を裂いて下さらなければならなかった。ただこのイエスさまにのみ、わたしたちの救いがあるのです。

<打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり>

神さまが、その救いへと招いて下さっている。イエスさまの十字架による罪の赦しに、復活の命に、招いて下さっている。

わたしたちは、ただ、それを受け取ることしか出来ないのです。ただ、感謝して、招きにお応えするしかないのです。そして神さまは、ただそのことを、望んで下さっているのです。

わたしたちは、自分が何者であるかを知らなければなりません。低い者、弱い者であることを知らされなければなりません。

神さまに造られ、神さまに愛され、神さまに生かされているにも関わらず、神さまを忘れ、神さまから離れ、神さまに背き続けた者であること。罪に深く捕らわれ、滅びに向かっている者であること。自分ではどうしてもできない、罪の悲惨さの中に落ちていること。

しかし、そのことを知って、わたしたちが打ち砕かれた時。自分の罪を知り、その底に立ち、あまりの低さに、あまりの深さに、絶望しそうな時。神さまの御前で、ただ赦しを願い、ただ救いを求めることしか出来ない時。まことに、「へりくだる者」とされた時。

その時、神さまは、そのような者こそ、共にいて下さる。命を得させる、と言って下さるのです。そのような者をこそ、御許に招き、喜んで迎え、恵みで満ち足らせよう、と言って下さるのです。

そのために、神の御子イエスさまは、低く低く降って下さったのです。わたしたちの中で、もっとも低くされたのです。わたしたちに仕えて下さること、わたしたちの僕となって下さることを、厭われなかったのです。この方に招かれて、わたしたちはどの上席に着こうというのでしょうか。この方の御前で、十字架の前で、どうして高ぶる者でいられるのでしょうか。

わたしたちは、救われるにあたっては、ただ神さまの恵みを受けるしかありません。そして、その救われた恵みに対して、わたしたちは神さまに、自分自身をまるごと委ね、まるごと献げることしか出来ないのです。

それはまず、礼拝をささげることです。神さまに祈り、賛美をささげることです。

そうして神さまに救われ、生かされたわたしたちは、自分の中の力や能力によるのではなく、神さまのものとされた自分自身を用いて、神さまからいただいた力や賜物を使って、神さまのなそうとしておられることのために、救いの恵みへの感謝として、喜んで努力をしたり、熱心になったり、また、忍耐したりすることが出来るのです。

神さまは、へりくだる者を高めて下さいます。罪の底から、天の御国へ。滅びの中から、永遠の命へ。わたしたちが神さまに向かって生きることを、心から喜んで下さいます。

低くされることは、わたしたちにとって苦しいことであり、認めがたいことであり、自分のすべてが打ち壊されるように思われることです。しかし、神さまは、弱り果てることがないようにと、いやし、休ませ、回復させて下さる。そこにこそ、新しい命を造り出して下さる。この御手に、わたしたちはただ縋りたいのです。

今日読まれた旧約聖書のイザヤ書 57:14~19 は、このルカによる福音書 14:11 「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」というところの、旧約聖書による解説だとも言われています。

この箇所の御言葉を最後にもう一度聞きましょう。

主は言われる。盛り上げよ、土を盛り上げて道を備えよ。

わたしの民の道からつまずきとなる物を除け。

高く、あがめられて、永遠にいまし／その名を聖と唱えられる方がこう言われる。

わたしは、高く、聖なる所に住み／打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり

へりくだる霊の人に命を得させ／打ち砕かれた心の人に命を得させる。

わたしは、とこしえに責めるものではない。永遠に怒りを燃やすものでもない。

霊がわたしの前で弱り果てることがないように／わたしの造った命ある者が。

貪欲な彼の罪をわたしは怒り／彼を打ち、怒って姿を隠した。

彼は背き続け、心のままに歩んだ。

わたしは彼の道を見た。

わたしは彼をいやし、休ませ／慰めをもって彼を回復させよう。

民のうちの嘆く人々のために

わたしは唇の実りを創造し、与えよう。平和、平和、遠くにいる者にも近くにいる者にも。

わたしは彼をいやす、と主は言われる。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの御前で、わたしたちが高ぶることがありませんように。

低く降られ、最も低くされた、十字架の主イエス・キリストの御前で、わたしたちが自分の罪を知り、打ち砕かれて、ただイエスさまの救いの恵みを求める者とされますように。

わたしたちは、あなたに差し出すものがないばかりか、御子の命を与えられなければならなかった者です。それでもあなたは、わたしたちを愛し、憐れみ、救いへと招いて下さいました。そして、わたしたちをあなたの御許へ、高きへと、引き上げて下さいます。

ただただ、その恵みを受け取り、ただただ、その御手に依り頼む者とならせて下さい。

へりくだる霊の人、打ち砕かれた心の人と共にいて、命を得させて下さる救い主、イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン